2008 年「堺市・連雲港市友好都市提携 25 周年記念事業」へのアクセス－その１－

逵　志保著『徐福論－いまを生きる伝説－』(新典社)

プロローグ

堺市と中国・江蘇省連雲港市は、1983 年 12 月 3 日に友好都市提携して以来満 20 年が経過したことを記念して、堺市において「20 周年記念事業」を開催した。

私が参加している「市民活動団体“堺なんや衆”」では、この機会に、堺市を会場として、中国・連雲港市の市民はもとより、韓国および日本国内各地の“徐福伝説”にゆかりある地域の市民の方々と交流することを目的として「徐福伝説」を共通のテーマとしたシンポジウムの開催を企画、提案した。

堺市および堺日中友好協会の合同からなる「堺市・連雲港市友好都市交流促進事業委員会」では、2003 年 10 月 24 日（土）に「中国文化セミナー“徐福”」を主催していただき、「市民活動団体“堺なんや衆”」も企画、協力の立場で参加させていただいた。

堺市が、連雲港市との友好関係を活かしてグローバルな市民交流の「機会」と「場」を提供することは、世界において東アジアの連携が一段と強く問われている昨今、相互のアイデンティティーを理解し、尊重を高める友好都市交流促進事業として大変意義のあることと実感しました。

今後の展開において、2008 年に開催が予定される「堺市・連雲港市友好都市提携 25 周年記念企業」を見据え、それまでの期間を利用して、再度、グローバルな市民交流のために相応しい共通テーマのあり方について考えてみたく思う。

その第 1 回として、「徐福伝説」を修士課程研究のテーマとして取り組んでこられた逵　志保氏の近著（修士論文を再構成、加筆）に今後の展開策を求めてみた。

逵　志保著『徐福論－いまを生きる伝説－』（新典者、2004 年）読書メモ

著者（逵　志保氏）から、この本の出版に関してお話しをお聞きした時、題名は、『徐福伝説の歴史的変容』であった。その後、著者の博士課程研究（「百済王の伝説」）との関連もあってか、本の構成を前後転換して加筆され、実際に発行されるまでには当初の予定以上の時間を要し、題名も『徐福論－いまを生きる伝説』と変わっていた。

出版社（新典社）から本が届いて読んでいくうちに、著者の研究過程の中に位置づける本書の意図を読み取ることが出来た。特に、本書の前段で詳述されている論点に注目した。

本書は、引用文献が 520 報と多く、文献に記されてきた徐福と現在を生き、生かされる徐福伝説の現象を同じレベルで論じている。一方、その現在を捉えることを目的として、現在、徐福伝説を取り巻く環境に動きの見られる特徴的な 2 ヵ所（福岡県八女市山内と三重県熊野市波田須）に注目した。

Ⅰ．序章

１．「徐福伝説」との出会いと研究の目的

1987 年春、日中学生交流を目的とした中国旅行に参加し、戦後の日本の団体として初めて中国江蘇省連雲港市贛榆県（かんゆうけん）を訪問した時、県長さんから「不幸な時代もあったが、中日往来の歴史は、すでに、徐福の時代に始っている」と聞いたことにはじまっている。

中国では、徐福は、日本建国に関わる人物と言われていることを知り、その後、文献の中に徐福像を探した。その結果、いろいろな姿で残っていることを知った。

しかし、書かれているものだけでは、現地の人々の動向は捉えきれない。「伝説」を知ることは、目の前の実践に目を向けることである。

外から入ってくる者を内なる者として伝えてきたのは、どのような社会的要請であったのか？どのような人々の心のありようであったのか？これらの問いは、そのまま、現在の伝承地の様々な動きへの問いである。

２．研究の方法

伝説としての徐福の歴史的変容とその現在を、生きている伝説という視点から考える。

⇒伝承地で、今まさに生き、生かされている徐福伝説を取り巻く様態
　わずかに流れ出した支流から、そこに生きる伝承の仕掛けを見出す試みをする。

⇒そこにある仕掛け・仕組みおよび現在に至る歴史的変容を文献資料を使うことでできる限り押さえる。

⇒伝説が拾い上げた過去の言説ではなく、実践として機能していることを確認する。

３．徐福の学術的研究の動向

文学では徐福を題材論として扱う研究が地道に積み重ねられた。

反面、伝承地では、徐福を歴史的事実として解明し、古代史の中に位置づけようとする動きがあり、かえって、古代史を含めた様々な分野で徐福を学問的な議論から避けさせて来た。

４．“伝説論”としての「徐福伝説」の位置づけ

「徐福伝説」は、口承文芸、伝承の偶然的な記録に過ぎないとの理由で伝説研究の対象とされていなかった。

つまり、「徐福伝説」は伝説から「落ちこぼれた話」として扱われた。

５．「伝説」という学術用語

「伝説」という学術用語は、柳田國男の創造で、「徐福」は伝説か否かという問いも、柳田國男の定義にどの程度忠実に従うかどうかでその答えも変わってくる。

柳田國男「伝説の定義」（“伝説”と“昔話”の対比）

伝　　説	昔　　話
・イワレやイイツタエ。中心に事物がある。	
・初めから本当だと信じる人がいる。	・初めから信じる人がいない。
・語りの話型を持たない。 （話の長短は問題とならず、聞き手により自由に構成される余地を持っている。時間、場所ともに限定的。）	・語りの話型が決まっている。 （「昔あるところに」で始まり、時間的に、空間的に移動が可能）
両者は、共に根底に“信仰”を有する点で近似性がある。	

・伝説は生きているが故に成長しないではいられなかった。柳田國男は、地域の独自性を強く主張していく伝説の変容によって、伝説が、「国土から跡を絶つ時代が来る」ことを危惧した。

６．「伝説」に関する諸説

佐々木高弘

・定着しようとする地域固有の具体的な場所、歴史、人物などをこまごまと取り込んでいく。

・同じ話しが、てんでばらばらの「本当にあったこと」の証拠物（場所、歴史、人物）と共に、あちこちで発見されその虚構が暴かれてしまう。

・そのゆえに、伝説研究が昔話研究に比べて低く見られ、進んでいない。
・普遍性と科学的な方法を指向する研究のあり方において、伝説の研究は、うさんくさい現実（場所）を切り離して、特に、文芸と信仰としての出来事だけに重点が置かれる。
・伝説に語りこまれる場所は、緊張経験した民俗社会の伝承者にとって他に変えがたい不変項である。

花部英雄

・昔話は、国を越えて広がりをもっているのに対して、伝説は享受層も狭く、地域に固着し引きこもりがちである。

福田　晃

・祭儀を求め、祭祀やそれに準じた営みをコトとして伝承し、コトの由来を説明する。

梅野光興

・伝説の研究の現在は、民俗社会の歴史認識を解明しようとする流れに移っている。
・歴史意識とは、主観的なものであり、歴史学者の考える客観的な歴史とは異なる。
・ここでの伝説は過去の出来事についての記憶という範囲まで拡大される。
・その記憶や伝承の仕掛けこそ伝説の本質的な部分である。

７．現存する「徐福伝説」の位置づけと扱い

これまでの伝説論の中で、徐福伝説は、「落ちこぼれた伝説」であったが、伝説の持つ豊かさは、その落ちこぼれた中にも含まれている。

現在、「徐福伝説」は、文字の記録との複合的な伝承の力によって、過去の話に止まることなく、今まさに各地で伝承され生かされている。文字による記録は、「伝承の偶発的な記録」というには、あまりに創造的な作品も含んでいる。

著者は、徐福伝説をとおして、伝説を取り囲む人々の創造性の側面を具体的に明らかにし、伝説の創造と変容の要因とされてきた時代や風土といった環境関連要因の分析により修正を加えたいと考えている。

Ⅱ．徐福伝説の現在

徐福の伝承地は、日本全国に 20 数箇所とも言われ、その数は増加の傾向にある。その筆頭は、新宮市（和歌山県）と佐賀市である。

これらの中で、著者は、現在、徐福伝承を取り巻く環境に特徴的な動きのあるところとして、八女市山内（福岡県）と熊野市波田須（三重県）に注目した。

徐福伝説を取り囲む多様・多重な伝承主体は、それぞれの思いを持って現在の関係性の中で動き、その結果、主導権を取り合うような場面も生れている。

伝承主体間の中には、調査者自信も含まれ、まさしく、そこに現在を生きる伝説の姿があることを指摘している。

１．八女市山内　－徐福を祭る－　「童男山ふすべ」

毎年１月２０日、「童男山ふすべ」という祭が童男山古墳で行われる。「ふすべ」は「くすべ」に通じ火をおこして煙をくすぶらす意がある。祭は、古墳のふもとの市立川崎小学校と童男山犬尾城址保存会の共催で行われるが、実質的には川崎小学校の主導で開催される。

川崎小学校は、６年生が上演する紙芝居「童男山ふすべ」で、以下の育成を狙いとしている。

①童男山ふすべの由来、主人公である徐福の霊のなぐさめ、遺跡保存を教える。
②外国人に対して郷土の人々が暖かく接した様子を知らせ、その心情の継続を教育する

＜参考＞ 古賀安徳;「“徐福さん“との再会」

『中国文化セミナー“徐福”』、79頁（市民活動団体“堺なんや衆”、2003年）

八女市の徐福伝説の場合、伝説の起源には躍動する伝説の力強さは見られないが、伝説を取り囲む人々のところでは、語り継いでいこうとする思い、そうした働きかけがある。

八女市の「童男山ふすべ」は、地域おこしという期待を背負って成長してゆく内的生命力を持ち続けている

２．熊野市波田須　－徐福を語る－　徐福の宝物由来、徐福の墓

徐福にゆかりがあると伝わりながら行くへの知れなかった宝物（すり鉢）が、思いがけず波田須に戻ってきたことが大きく影響している。

その他、徐福神社や徐福の墓の存在が伝わっていることも分かってきた。

＜参考＞ 三石 学:「“徐福”は今も熊野に生きている」

『中国文化セミナー“徐福”』、82頁（市民活動団体“堺なんや衆”、2003年）

郷土史家が不在となったことにより、地域人々が、自ら語る以外に方法がないことに気がつき、本来の伝説の語り手としてその役割を戻してきた。

さらに、最近の動向として、現状の地域の語りでは満足できない人たちにより「熊野徐福研究会」を発足させ。アカデミックなアプローチも考えられている。

Ⅲ．徐福伝説の歴史的変容

徐福伝説に関する最も古い資料は考古学的資料ではなく、既に文字化された文献資料（紀元前91年：司馬遷『史記』）である。

徐福伝説は、主に、その豊富な文献資料をもって知られてきた経緯も有り、伝説を口承文芸の中に位置づけてきた民俗学の伝説の研究の中では、これまで異端児として扱われてきた。

文字化されて残された作品以前に、既に伝承があったのかどうか、それを突き止めることは出来ないが、少なくとも書き留めたその時点で一つの徐福伝説が創造されていることは確かである。

さらに、『史記』のように徐福伝説のいきさつを記すだけではなく、作者の興味に任せて次第に徐福渡海の意味づけや後の様子が加えられて変容を重ねながら、徐福伝説は日本に結び付けられていった。

中でも、徐福の類書への登場は、書物の性質が故事を確認したり、詩文に用いる語句を見出すためのものであるだけに、次の作品が生れていくきっかけにもなり、影響が大きかったと考えられる。

そして、永い歴史的変容を経て現在に至り、徐福伝説は、これからも変容しつつ伝承されていくと考えられる。

これらの考えを踏まえて、著者は、徐福伝説の文献上の起源に帰り、現代までの時間の流れの中で、時代の要請や個人の想像力によって、創造と変容を繰り返してきた過程をたどり、現在に至る伝承の背景を膨大な文献からあとづけた。

文献の初出以来、現代までの時間の流れを、時代的背景との相関性において見るために、著書を参考にして、表―1に「“徐福”記述文献時代別成立分布と経緯」として示し、表―2に特に文献成立の数が急増している20世紀について、10年毎の時代的区分に細分化して文献成立の分布を示した。

１．「徐福伝説」の初出

一般に、徐福伝説の初出は、『史記』秦始皇本紀第六の記述と言われ、秦始皇本紀の中では、

三ヵ所にわたって登場する。

『史記』は、漢代、征和二年（紀元前 91 年）に司馬遷によって完成された中国正史の筆頭で、通史という特徴があり、歴史書としての信憑性が非常に高いと評価されている。

『史記』における“徐福”についての記述

・秦始皇本紀 28 年（紀元前 219 年）：

「斉人徐市等上書して言ふ、海中に三神山有り、名づけて蓬莱、方丈、瀛洲と日ふ。僊人之に居る。請ふ斎戒して、童男女と與に之を求むることを得ん、と。是に於いて徐市をして童男女数千人を発し、海に入りて僊人を求めしむ。」

・秦始皇本紀 35 年（紀元前 212 年）：

「徐市等は費やすこと巨万を以って計ふれども、終に薬を得ず。徒に姦利をもて相告ぐること日に聞ゆ。」

・秦始皇本紀 37 年（紀元前 210 年）：

「方士徐市等、海に入りて神薬を求め、数歳なれども得ず。費多し。譴められんことを恐れ、乃ち詐りて日く、蓬莱の薬、得可し。然れども常に大鮫魚に苦しめられる。故に至ることを得ざりき。願わくは善く射るものを請ひて與に俱にせん。見われなば、、則ち連弩を以って之を射ん、と。」

天下統一を成し遂げた始皇帝は、唯一思い通りにならない我が身の永遠を憂い、求仙に膨大な財をかけた。徐福は、秦の始皇帝の命を受け、不老不死の薬を求めて童男童女数千人と百工とともに五穀の種を持って東海に船出し、終には、不死薬のある地を望見して平原広沢を得て王となり帰らなかった。

『史記』の「始皇本紀」は、政治史といわれるものであるが、徐福については、中国文化史といわれる「封禅書」および個人の記録といわれる「淮南衡山列伝」にも描かれた。

特に、「列伝」には、司馬遷の人間観が鮮やかに表現されているといわれ、司馬遷の執筆姿勢で描かれ方は大きく変わる。司馬遷によって書き記されたその時が徐福伝説の創出といえる。

２．日本における初出　ー　古典文学への影響

徐福伝説には、平原広沢の王となって生き抜く徐福と李白や白楽天の童男童女と共にむなしく老いて死んでいく徐福という二つの柱を作り上げた。

盛唐の時代（626～756 年）、李白および白楽天など十を越える唐詩作品に徐福がうたわれ、日本の古典文学に大きく影響を与えた。

日本における徐福伝説の初出は、天元年間以後（980 年頃）、『宇津保物語』である。白楽天の詩「海漫漫戒求仙也」から、童男童女と共にむなしく船の中で老いて死んでいく徐福を取り込んでいった。

その他、紫式部『源氏物語』胡蝶の巻（1000 年頃）、紫式部『紫式部日記』（1009 年）、『平家物語』巻 7 「竹生島詣」（1220 年頃）、『太平記』巻 26（1370 年代）、『蓬莱物語』（1660～1690 年）など、これら日本古典の中に、白楽天の描いた童男童女と共に船の中で老いていく徐福の結末が永く受け継がれ顔を出した。

そして、変容の過程の中で『史記』の徐福像も汲み取られていくにつれて、船の中で老いると

いうむなしいい結末の徐福像は次第に姿を消していくことになった。

３．徐福の日本渡来

明確に徐福の日本渡来を記したものは、五代の後周、斉州開元寺の僧釈義楚の『義楚六帖』巻二十一で、この書は、この後、様々な文献の典拠として大きな役割を果たすことになった。

顕徳五年（958 年）、日本僧の瑜伽大教弘順大師賜紫寛輔から聞き取りという形式をとりながら日本渡来説は生成され、日本で平原広沢を得て、王となって帰らない徐福がクローズアップされていった。

日本は、秦の始皇帝に時代に、徐福が童男童女各 500 人を止めた地であり、第一の霊異として金峯山を挙げ、富士山を蓬莱と説明した。徐福は、蓬莱の地に止まり、今では、子孫が皆、秦氏と名乗っている。

これを機会に、徐福の日本渡来説が中国で定着していくこととなり、その後も、欧陽脩が「日本刀歌」（1055 年）で、徐福を文化史的意義を与えようとした。

徐福が船に乗せた先進の技術者によって、日本刀が作られ、焚書坑儒の前に徐福の出港があったため、徐福が多くの中国の逸書を運び出しており、今の日本に残っていることなど徐福の日本渡来が文化史的意義があることが述べられている。

嘉永２年（1849 年）、本居内遠は、『かはらよぎ』で、「日本刀歌」について、日本刀を褒めるのは、中国からの先進技術だからと言いたいだと中華思想の表れと批評している。

日本において、徐福の日本渡来が明らかに書き記されたのは、中国で『義楚六帖』が書かれて 400 年後の延元 4 年～興国 4 年頃（1340 年）、北畠親房『神皇正統記』の第七代高霊天皇の条に秦の始皇帝が長生不死の薬を日本に求めたことが書いてあることによる。

４．歴史か、伝説か

中国の正史は、『史記』以降も、後漢の時代（92 年頃）・班固『漢書』巻 25 下、『漢書』巻 45、晋代（297 年）・陳寿『三国志』巻 47、唐代（700 年頃）・呉競『貞観政要』、983 年・李昉『太平御覧』巻 782 に徐福を記録し続けたが、日本に行ったとは書いていない。

一方、日本の正史には徐福は登場しない。

「伝説」という学術用語を創造し、その定義を設定した柳田國男は、伝説を人々の語り、象徴的には文字を読めない人々による語りの中に見出そうとしていた。

だからこそ、文献の中でひっそりと息づいていただろう徐福の伝承を、自身の定義する「伝説」という枠組みの中に含まなかった。柳田國男の伝説論を知ることで、そのまま、民俗学の中におかれてきた徐福の位置を明らかにすることが出来る。

文献資料の最後に、柳田國男の徐福伝説に関わる記述を置くのは、なにを伝説と捉えるかが、時代の文脈の中で常に変動し続けると思えるからである。また、それは伝説を文章のみで議論することが、いかに伝説が持つ豊な意味をやせ細らせているかということをも示すことになる。

柳田國男の民俗学は、文字に書かれたものだけを対象とする文献史学への強い対抗意識をベースに成立している。文献史学が、資料とする書かれたモノは、文字を使える特権的な階層の視点から特権的な階層についてのみに記された歴史であり、これは歴史全体から見れば、ごく一部の歴史でしかないと考えていた。

これまで顧みられることのなかった文字をもたない「常民」の歴史を描くこと、常民の暮らしの中の豊な工夫をすくい上げることに柳田國男の民俗学の出発点があった。

柳田國男は、それぞれの土地で、徐福伝説が伝承されていたかどうかについて、これまで見てきた文献のみで伝承の全てを知ることは出来ないことなどから、徐福の伝承を伝説として取り上げようとしなった。

柳田國男は、徐福伝説は、「中国古代の小説のひとつの型」だとしながら、徐福伝説の伝播と成長の底にある力に注目している。そして、徐福が多数の童男童女を連れて出港したことに注目し、一つの移民だと解釈した。移民という表現は、向う側も受け入れる側も対等である。徐福を移民と位置づけることに、戦後の新たに生きていく策の提示があると思われる。

そして、「徐福はローマンス」で終わる。

徐福」は、伝説として時代の政治的傾向に大きな影響を受け、様々な変容をし、あるいは変容を強いられてきた。

５．徐福は終わらない

１）「伝承モデル」の変化

★本来の伝承モデル：

地域社会の中ひっそりと語りを通じて世代から世代に綿々と伝承さていくものである。

★徐福伝説の現在：

・書かれてきた文献と語られてきた口承とが併存する。

・多様・多重な伝承主体が伝説を取り巻いている。

伝承主体は、本来の伝承者および伝承の管理者ではなく、土地の熱心な郷土史家や行政担当からの場合が多い。

・伝説が、それぞれの時代の政治的傾向に大きな影響を受けてきた。

特に、1972 年（日中国交正常化）から高まり、1982 年（徐福村発見）から噴出してきた。日中交流の証として受け入れ、活かそうとしている。

★徐福伝説の新たな現象：

・「徐福」の商品化、伝承地位外への普及

・背景：伝説の枠組みを越え、自由に時間と空間の移動が出来る昔話化の過程

・キーワード：不老不死、長寿、中国人、古い歴史、地域振興、国際交流、シンボル

例　佐賀市：「徐福餅」、洋菓子「徐福さん」

新宮市：「徐福茶」、健康食前酒「徐福ロマン」

京都府伊根町：薬用入浴剤「蓬の香」、清涼飲料水「蓬・健康ドリンク・仙丹」

富士市：駅弁「徐福さんちのお弁当」

２）なぜ、今、徐福伝説なのか

これまでの徐福伝説は、文献資料が多く、政治的な色彩から逃れることが出来ないため、伝説研究としては顧みられることがなかった。しかし、地域で、伝承してきた人々とそれを取り囲む人々が、多様に伝承に関わっている徐福伝説は、これまでの伝説研究とは別の視点を与えてくれないだろうか。

語りの媒体も、観光パンフレットだけではなく、インターネットなど、より多様化し、それら

の媒体が伝承を変容させていくことも予想される。より広範囲な伝播へと変化することで、新たな創造も噴出してくる。

現在の問題は、

①伝説の生成とそのダイナミズム（成長していく内的な生命力）に注目してゆくこと

②伝説を実践として捉えてゆくこと

③かつて、人々は何に意味を見出して生きてきたのかに気づくこと

④私たちが、「今、どのように生きていこうとしているのか」という問いに伝説が深く関わっていることに気づくこと

⑤自分自身が、新しい伝説の動向の中でそれを動かしている一人だということに気づくこと

地域で語り継がれてきた徐福伝説は、現在、グローバルな文脈の中に投げ込まれ、触れあわされつつある。伝説という伝承は、歴史の誕生に直面してきたものとして位置づけが見えてくる。

今後の取り組むべき課題は、

①伝承モデルの見直し

②東アジア共通の研究素材としての位置づけ

伝説が生きていることを実感する。それは、歴史と昔話の間を伝説がつないでいるという実感でもある。

こぼれ落ちてきた伝説の中から、いまを生きる伝説の豊かさを汲み取ることが出来た。

エピローグ

「徐福」を地域の歴史ロマン溢れる伝説として捉え、そこに意味を見出そうとしている。このような動きにより、「徐福伝説」が古代史の歴史的な証拠集めから解き放たれ、伝説として生き生きとしてきた。

各地の郷土史家や熱心な古代史研究家の熱意で地域の伝承やローカルな文献資料は増加しており、また、貴重な資料であっても、個別に資料が山積しているだけであって、徐福の研究を進めていく上でどんな意味を持っているのか、それら資料の関連が議論されることもなく、総合化の試みに向っていない。

こうした渡来人の伝説を、中国、韓国、日本という国と国との枠組みの中に閉じ込めてしまうのではなく、それぞれの地で伝承される伝説に込められた心意を明らかにし、海を取り巻く東アジアの多くの地域の伝承とつなぎ、渡来人の伝説を通して見えてくる東アジア地域の新たな像を描いてみたいという著者の“思い”は、読者に思いのほか噛み応えを感じさせ、考えさせられた。

「歴史を未来へ！」、特に、現在、東アジアにおいて「歴史認識」が焦点となっている昨今、昨年、我が家に中国・国家行政院研修生の李海軍さんおよび孫大為さんがホームステイされた。酒を酌み交わし、食事をしながらの関でもこのことは話題となった。

堺市と連雲港市との友好関係を機軸として、堺市で、韓国および日本全国のゆかりある地域、人々と“徐福”をテーマとして市民交流の輪を広げたいとの“思い”から、そのあり方について考えてみたいとみたいと、ここに、逵　志保著『徐福論－いまを生きる伝説』（新典者）を取り上げてみた。

“生誕”と“出港”を歴史認識で捉える中国の市民に対して、通過地点（韓国）と渡来（日本）

を伝承、伝説として受け止める状況にある市民の認識の違いが現実となっている。この認識の相違のもとで市民交流の接点はあるのだろうか？

認識の違いを超えて、なお、“徐福”のテーマには、柳田國男をして言わしめた「ローマンス」と言う切り口にその救いがあるのか？

著者が、今後の課題と指摘した「伝承モデルの見直し」と「東アジア共通の研究素材としての位置づけ」への取り組みを含めて、訪問者の皆さんからご意見をお願いし、2008 年「堺市・連雲港市友好都市提携 25 周年事業」に期する市民交流のあり方を煮詰めながらアクセスして行きたい。

以上